

第5回 哲学系読書会(仮)2020年03月19日

報告者:ハマ

場所:北区区民ホール

テキスト:ソシュール『新訳 一般言語学講義』町田健 2016年9月1日 初版

1857年11月26日 誕生 ジュネーブ

1907年 第1回一般言語学講義(1月16日～7月3日)

1908年 第2回一般言語学講義(11月第1週～翌年6月24日)

1910年 第3回一般言語学講義(10月28(or29)日～翌年7月4日)

1913年2月22日夕刻、ヴェフランの城に死す(55歳3ヶ月)

第4部 言語地理学

第5部 回顧的言語学の諸問題 結論 (了)

第4部 言語地理学

第1章 言語の多様性について p.268

言語現象と空間の関係

内的言語学: 言語そのもの

外的言語学: 文化史・政治史・地理的な要因を含む、いわゆる「社会的」

ある地域から別の地域に移動するとき、すぐに現れてくる違い。時間ではなく空間の移動
空間での分岐・この相違に出会うことで、民族が自分の固有語を意識するようになる。

「固有語」ー共同体のラング。肌の色、頭の形などとは違う属性

どの民族も自分の固有語の優位性を信じる。

地理的な多様性、言語学において最初に確認された事実。ラングの研究の最初の形態が決定。

ギリシャ人(民族)の関心、ギリシャ語の方言の多様性だけ、ギリシャそのものの境界を超えることはない。

二つの固有語ー類似性の発見 それらの言語が共通に持っている特徴に気づく

学問研究では、このようにして確認された事実を利用できるようになるまでには、膨大な時間がかかった。

1816年フランツ・ボップ『サンスクリット語の活用体系』比較言語学の始まり。(p9)

2つそれ以上の固有語が、類縁的な結びきで統合、共通の起源を持つこと。語族

インド・ヨーロッパ語族、セム語族、パントゥー語族・・・

これらの語族の比較、さらに広範で、さらに古い連関

フィン・ウゴル語族とインド・ヨーロッパ語族、インド・ヨーロッパ語族とセム語族の間の類似

諸言語が全体として類縁関係あるという可能性、それが真実であったとしても、証明することはできない。トロンベティ 言語の単一起源説

1) 類縁関係が認定も論証もできない、絶対的な多様性

インド・ヨーロッパ語族からみた中国語

一方を他方に帰着することはできない。比較は常に可能である。

音の体系、文法的組織や思考表現の一般的な型の比較・・

様々な比較は恒常的に存在する音声的、心的な事実によって制限を受ける。

相互に相手に帰着できあない、このような恒常的な事実を発見することが、主要な目的。

2) 類縁関係の中の多様性 語族の内部に存在する

ゼンド語とサンスクリット語 驚くほど似ている

サンスクリット語とアイルランド語 全く似ていない

あらゆる微妙な差異が可能。

方言と言語の間には、量的な相違があるだけで、質的な相違はない。

第2章 地理的多様性の複雑化 p.271

第1節 同一の地点における複数の言語の存在

同じ領域に複数の言語が共存するようになった二次的な事実の考察

1) 機構的な混合 2つの固有語が相互に浸透して体系の中での変化

ノルマン人による征服後の英語

2) スイス 領域的には明確に分離しているが同じ政治的国家的境界内に複数の言語



考察の対象：上記2つ以外の事実 2つの固有語が、混同されずに共存することが可能な事実

新しい住民の言語が、先住民の言語の上に重なってくる

南アフリカ オランダ語、英語、黒人の方言 このような言語的な侵食は近代特有のものではない。

アイルランド：ケルト語と英語

古代：ローマ帝国 カンパニア地方では、オスク語、ギリシャ語、ラテン語、エトルリア語

言語の重なり合いが生じた原因

1) 軍事力に勝る民族の侵入

2) 植民地化や平和的な進出

3) 放浪民が自分たちの言葉を持ち込み。ローマ人

ドナウ川河口域のドブロジャ：タタール人

・・・事例を上げる。

第2節 文学語と地域の固有語 p.273

自然的な固有語が、文学語の影響を受け、言語的な統一性が損なわれる。

「文学語」、文学の言語だけではなく、あらゆる種類の教養ある言語。公的なものかは問わない。

共同体全体に供されるものであればいい。

自由な状態に置かれると、言語には方言しか存在しなくなる

どの方言も他の方言に侵入することはなく、言語は無限に分裂する運命

文明が発展—暗黙の合意によって、方言の一つを選択して、全体としての国家に関わるすべてのものを伝達する媒体とする。

選択の動機：文明の最も進んだ地域の方言を優先。

政治的な主導権を握っている方言を優先

宮廷が自分の言葉を国家に押しつける。

いったん公用語や共通語の地位にまで昇進すると、他の地域の方言的な要素がこれと混じり合い、混成の度合いがましていくが、もとの特徴を完全に失ってしまうわけではない。

フランス語の文学語、ルイ・ド・フランス地方の方言

イタリア語の共通語、トスカーナ地方の方言

住民の大部分は二言語使用者、地方の俚言も使用する。あらゆる場所で、公用語と並んで方言が残存。

あらゆる時代に、一定程度の文明を持ってやってきたすべての民族のもとで起こった。

広く使われる言語は、必ず文字の使用を前提としない。ホメーロスの詩、文字表記はなかった。

自然的な地理的多様性を阻害するものは考慮せず、外国語の移入や文学語の形成すべての外部にある、最も重要な現象を考慮する。

自然的な事実そのものを、まずは研究する必要がある。

ベルギーの例



ブリュッセルは、フラマン語地域—ゲルマン語圏だがフランス語も話されているが、重要なのはフラマン語領域とワロン語領域の境界線だけ。

リエージュはワロン語の領域にあるので、フランス語は、同じ起源を持つ方言の上に重なっている外国語にすぎない。

・・・事例を上げる。

第3章 地理的多様性の原因 p.276

第1節 最も重要な原因としての時間 p.276

絶対的な多様性 純粋に思弁的な問題

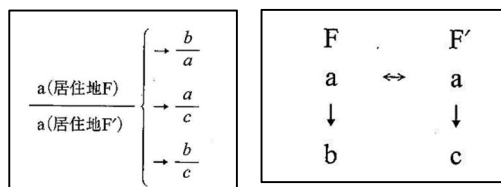
類縁関係の中の多様性 現実には観察できる対象

フランス語(北)とプロバンス語(南)はどちらも俗ラテン語にさかのぼるが、ガリアの北と南では俗ラテン語の進化が異なっていた。共通の祖先を持つことの原因は、事実に物質性があることである。

{これらの共通起源は、事実の資料性に由来する} (小林英夫訳)

居住地(F)から居住地(F')への移住

2箇所での変化の様子、時間の経過による言語的特徴aが別の特徴(b, c, d・・・)に置き換わる。



この変化の原因は空間だけでない。時間が原因で言語の分化が生じる。

地理的な多様性は時間の多様性に翻訳されなければならない。

地理的な相違の図式は、時間の上に投影されなければならない。

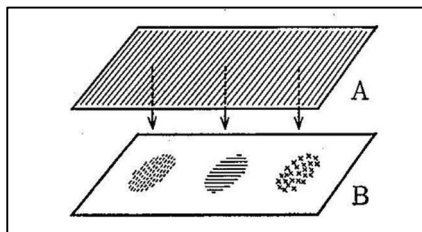
地理的に条件づけられるかは、疑わしい (p.207 音変化)

地理的な多様性は、一般的な現象の二次的な側面にすぎない。類縁関係にある固有語の統一性は、時間の中にしか見い出されない。

第2節 連続した領域における時間の作用 p.278

1) ランゲージに関しては、絶対的な普遍性は存在しない(p. 113 可変性)から、一定の時間が経過すると、言語はもはや自分自身と同じではなくなる。

2) 領域の全体で、進化は一様でなく、場所によって変異がある。

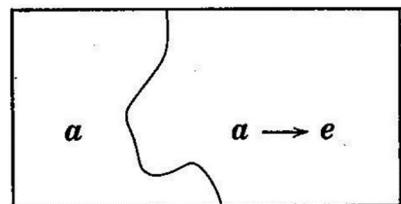


多様性はどのようにして始まって姿を現し、最終的に、あらゆる種類の方言形態が作りだされるのだろうか

進化・改変の2つの特徴

1) 改変の範囲が領域全体に渡り、方言的な違いは発生しない。極めてまれ

2) 変容が領域の一部にしか及ばず、方言的な事実がそれぞれ固有の範囲を占めるもの。



異なった領域が存在する。自然な進化のまま放っておかれた場合、すべての地点で言葉に多様性が生じる。どのように範囲が決まるかを予想することはできない。

その領域は後で確認するしかない。重なり合い、時にその形状が矛盾をはらむこともある。

(事例の列挙・・・・・・・・)

どんなことが結果として生じることになるだろうか。

同じ一つの言語が領土の範囲全体を支配したとしても、5世紀、10世紀が経過すると、両端の地点の住民は、恐らくもう互いに理解し合うことができなくなっている。

隣接の地域の言葉を依然として理解し続けていることもある。

個別の特徴のそれぞれがどの距離まで広がるのかを予測することは不可能である。

第3節 方言には自然的な境界などない p.281

「方言について普通考えられていること」境界が定まっていて、並置され区別された領域を覆うもの。自然な方言的特徴があるだけで、自然的な方言は存在しない。場所と同じだけの方言がある。

「自然的な方言という考え方」と「何らかの程度の広がりを持つ地域という考え方」とは相容れない。

2つの道

1) 方言をその特徴の全体で定義するもの

2) いろいろな特徴のうち1つだけで、方言を定義すること

方言地図。ジリエロンによる「フランス言語地図」(1902年)

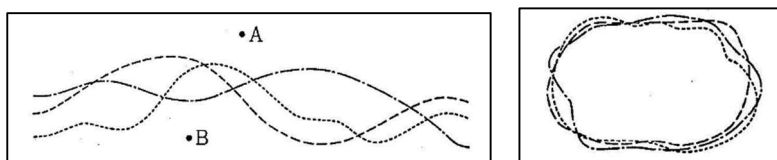
1893年にはフランス方言学会(Société des parlers de France)を設立。

方言的な特徴の境界は「等語線」と名付けられた。曖昧で不適切な用語。

「同じ言語を持っている」という意味を表すから。

「言語素」という用語が「固有語の特徴」を意味することを認めるとしたら「言語素線」という用語の使用が許されるとすれば、より正確に状況を表すものになるだろう。「改変の波」という用語の方がさらに望ましいと思われる。

シュミット、言語変化が、波紋のように広がるという「波紋説」を発展させた。



2つそれ以上の範囲の一致が十分に大きくなると、概略的にそれは方言だと言うことができる。社会、政治、宗教などの事実によって説明されるが、ここではすべて捨象しておく。

「言語地図」は固定的なイメージを想起させるから、嫌ったのだろう。

第4節 言語には自然的な境界などない p.283

言語と方言との間に違いが何にあるのかを言うのは難しい。

文学を作りだしたとの理由で、方言が言語だと称される場合。ポルトガル語、オランダ語理解可能性がなければ異なった言語。

方言の場合と同様に、類縁関係にある言語の境界線を定めることができない。

高地ドイツ語がどこで終わり、低地ドイツ語がどこから始まるのかを言うことができないのと同様に、ドイツ語とオランダ語、フランス語とイタリア語の間に境界線を引くことは不可能。中間的な地域に入ると、この区別はなくなってしまう。

2つの言語を分離するとみなされる境界も、習慣的なものにすぎない。

ある言語から別の言語へと突然移行する場合も、よく見られる。

住民の移動、このような移動が何世紀にもわたって蓄積されることによって、多くの地点で、言語の推移についての記憶が失われてしまったのである。

インド・ヨーロッパ語族

スラブ語はイラン語とゲルマン語にまたがっている。

ゲルマン語は、スラブ語とケルト語の間の中間的な環に当たると考えることができる。

ケルト語は、イタリック語と非常に密接な関係にある。

イタリック語は、ケルト語とギリシャ語の中間。

固有語の集団2つの境界線：スラブ語とゲルマン語の境界

突然の飛躍が、中途の移行なしに現れてくる。一方が他方へと溶け込むようなことはなく、互いにぶつかり合う。中間的な方言が消滅してしまったからである。

スラブ人もゲルマン人も移住して、互いの犠牲の上に領土を征服した。

過渡地帯を消滅させる原因、俚言を犠牲にして共通語が拡大すること

数多くの言語的境界においては、中間的な言葉の記憶はすべて失われている。

第4章 言語的な波の伝搬 p.286

第1節 交流(インターコース)の力郷土愛 p.286

個別化する精神、「郷土愛」{「縄張り根性」：小林英夫訳}

他方には「交流」の力があって、人々の間の伝達行動を作り出している。

「郷土愛」によって、限定された言語共同体は、その内部で発展してきた伝統に忠実でいる。

習慣には力と持続性がもたらされる。ランゲージュに関しては、無限に向かう個別性が作りだされる。

「交流」によって、人間は互いに繋がり合うように仕向けられる。1

統合の原理であり、「郷土愛」による分解作用に抗するものである。

言語の拡大と凝集は、「交流」が原因

否定的な作用：ある地点で改変が生じた時に、それを封じ込めることによって、方言の分化を妨げる

肯定的な作用：この改変を受け入れて広めることによって、統一性に有利な働きをする。

方言的な事実の地理的な境界を表すために「波」という言葉を使うことを正当化するのは、交流の2番目の形態（肯定的な作用）である。

等言語素線は、拡大し、そして逆流することもある洪水の最果てのようなものである。

同じ言語の2つの方言が、お互い非常に離れた地域にあるのに、共通の言語的特徴を持っていること。

領域のある場所でまず起こった変化が、その伝播を妨げるものに出会わず、出発点から遠く離れたところまで到達したからである。

個別的な事実がこのように普及する場合、時間を必要とする。

ドイツ語の事例、フランク語の事例

1400年頃にボヘミアを出発し、300年経てようやくライン川に到着し、現在のような範囲を覆うようになった。

時間という要因で、地理的な多様性を説明するには十分である。

この原理を完全に実証するには、改変が生じた場所を考察しなければならない。

ドイツ語の子音推移の例

この種の改変は、それが生まれた場所では、純粹に音声的な事実である。しかし別の場所では、地理的、そして伝染によってしか生じることはない。

[t]→[ts] 改変が起きた場所でしか単純な形で有効。現象が拡大すると、不正確な像をもたらす。

音声学者、改変が起きた場所と、伝染が生じる領域を区別する必要がある。

改変が起きた場所：音素は時間軸の上だけで進化

伝染が生じる領域：時間と空間の両方が関わるから、純粹に音声的な事実の論理で済ますことはできない。音変化でなく、音素の借用

第2節 単一の原理に帰着する2つの力 p.288

領域のある一定の地点（村）：対立する2つの力のどちらに由来するのかを区別するのは容易

別の方言と共通の特徴はすべて、交流に由来

その地点（村）に属する特徴はすべて、「郷土愛」

郡のような平面（領域が広がる）：どちらの要因に関係しているかを言うことはもはやできない。

「交流」、「郷土愛」対立しているが、固有語の特徴すべてに関係してくる。

2つの力が同時に作用している。交流が改変を促せば促すほど、その範囲は拡大する。

郷土愛の本質：言語的事実が獲得された境界の中で、その事実を保持し、外部からの競争に抗してそれを保護することにある。

この2つの力の作用から、何が帰結するかを予測することは不可能である。

アルプスから北海に及ぶゲルマン語の事例

郷土愛が南部と北部の間の対立を生み出した。

境界の内部では、交流のおかげで、言語的な連帯がある。

この2番目の現象と最初の現象との間には、根本的な違いはない。同じ力が対立しているだけであり、その作用の強度が異なっているだけである。

平面では、個別化の力（郷土愛）を無視することができる。

個別化は統一化の否定的な側面。

統一化の力が十分に強力であれば、平面の全体（広い範囲）に統一が見出されることになる。

限定された範囲も、それを構成する部分に関しては、まとまった全体を表している。

「郷土愛」を持ち出さずに、統一化の力だけに、すべてを帰着させることができる。「郷土愛」は、それぞれの地域に特有の、交流の力に他ならない。

第3節 別々の領域における言語的分化 p.289

単一言語の集団の中—まとまり方が違う。改変がすべて普及するわけではない。地理的な連続性が絶えざる分化を妨げるわけではない。

別々の2つの領域で、平行的に発展する言語的事例に取り組むことができる。

ゲルマン語がブリテン諸島に浸透。ゲルマン語の進化は二分

ドイツ語の諸方言とアングロ・サクソン語。カナダに移植されたフランス語。

不連続は、いつも植民地化や征服の結果だというわけではない。

孤立化。ルーマニア語—スラブ民族が間に入ることによって、ラテン語の集団との接触を絶たれた。

時間という要因が優越した作用を明らかにする。

狭い領域：平行的に発達する固有語

広い領域：方言的な分化へと繋がっていく。

不連続な領域で生じる事実、分離を持ち出さないでも説明できることを、分離が原因だと考えてしまわないようにすること。

初期のインド・ヨーロッパ語学者たちの誤り。地理的な分裂以外の原因で、この状態が作り出されることもありえたと考えなかった。

異なった言語を別々の場所にあるものとして思い浮かべるのは、容易。

言語の概念を国民性の概念と結びつけてしまい、国民性が言語を説明するのだとした。（逆）

スラブ人、ゲルマン人、ケルト人などのことを、同じ巢箱（インド・ヨーロッパ語族）から出てきた同じだけの群れだと考えた。

移民によって同じ祖先から切り離され、同じだけの異なる領域に、インド・ヨーロッパ語を持ち込んだとされる。（固定・孤立化）

連続性、波動の論理（波紋説）1877年ヨハネス・シュミット

同じ場所での分化が、インド・ヨーロッパ諸語の間の相互関係を説明するのに十分。

波紋説：あらゆる分化現象に関わる最も重要な法則と、諸言語の類縁関係を支配する条件を明らかにしてくれる。

波紋説：移民の論理に対立するものであっても、必然的に排除するものではない。
移動によってこの大語族から切り離された民族の例が数多くある。特別な結果をもたらす。
この影響は、連続性の中で分化した結果に付け加えられるに過ぎない。
古英語の例：移民の結果ゲルマン語の祖先から分離した言語。
サクソン人が大陸に残っていたら、英語は現在のような形にはなっていなかっただろう。

分離がもたらした特別の変化。地理的に連続している場合でも同様には起こり得ないか？
絶対的な分離が原因だとされる事実が、隣接した領域を仮定した場合、起こらないと主張できるか
この誤りは、いつもと同様に、孤立した方言と連続した諸方言を対立させていることに起因している。

分化を説明するために、孤立化に頼る必要はない。
孤立している場合には、分離した時点から、あらゆる関係が潜在的に絶たれているのに対し、地理的に連続している場合には、たとえ明確に異なる方言の間でも、中間的な方言によって関係が保たれている限りは、一定の連帯が存続するということである。
類縁性の程度を評価するためには、連続性と孤立化を厳密に区別しなければならない。
いずれにしても排除されるのは、伝染によってこれらの特徴が伝わるということである。
これらの諸方言はまさに、木の幹から分離した、明確に異なる枝を形成するのである。
連続した領域にある諸言語の間関係
共通の特徴は、多様化している特徴より古いということは、必ずしもない。
改変の範囲は、場合によって広さが異なるので、隣接している2つの固有語が、個別的特徴を共有していても、全体の中で区別される群を形成せず、それぞれが、他の特徴によって別々の隣接する固有語と結びついているということもありうる。インド・ヨーロッパ諸語はこのような状態を示している。

第5部 回顧的言語学の諸問題 結論

第1章 通時言語学の2つの観点 p.294

共時言語学では、ただ1つの観点、発話主体の観点しか許されず、方法も1つしか認められないのだが、通時言語学では、時間とともに進む展望着な観点と、時間をさかのぼる回顧的な観点の両方が想定される。

ある言語の歴史を、そのあらゆる詳細まで明らかにするためには、すべての時点で撮影された無限の写真を所有している必要がある。

展望が単なる叙述であり、文献の批判に全面的な基礎を置いているに対し、回顧では、比較に依拠する再建的な方法が要求される。

1つの孤立した記号の祖型を明らかにすることはできないが、起源を同じくする2つの記号を比較することにより、ある通時的な単位がすぐ、垣間見える。

比較される項目の数が増えれば増えるほど、この推論はますます正確になり、資料が十分にあれば、正しい再建に到達することができる。

ギリシャ語、ラテン語、古スラブ語などの類縁関係にある言語の一群からは、・・・空間において分化する前に存在していたような、インド・ヨーロッパ語の本質的な部分を再構築できた。

回顧的方法によって、・・・原初の統一的状态を探索した。

回顧的方法によって、最古の文献の向こうにある、言語の過去の中に入り込むことができる。

ラテン語の展望的な歴史は、紀元前 3, 4 世紀にしか始まらない。(文献)

インド・ヨーロッパ祖語の再建のおかげで、原初的な統一から、ラテン語の最初の文献までの間にわたる期間において、なにが起こったかについて考察することが可能になった。

進化言語学は地質学と似通っている。

地質学、通時態を形成している出来事や変形である。

地球のある地点で起こったことを語る前に、一連の出来事を再構築して、地球のこの部分を現在のような状態に導いたものを研究する必要があるからである。

展望的な方法で研究する場合

古典ラテン語の[e]がフランス語でどうなったのかを考える。

単一の音が、時間の中で進化して、いくつかの音素を生み出したことがわかる。

回顧的に研究する場合

フランス語の広い e[]がラテン語で表すものを、回顧的に研究すれば、もともとは異なっていたいくつかの音素であったものが、単一の音に到着したことが確認される。

形成的な要素の進化も、2つの方法で示すことができる。

回顧的に-eで終わるフランス語の過去分詞の語尾の起源を研究すると、ラテン語の-atumにさかのぼることがわかる。

第2章 最古の言語と原型 p.298

インド・ヨーロッパ言語学は、比較の本当の目的も、再建する方法の重要性も理解していなかった。

サンスクリット語の役割を過大に考え、・・・この文献が原型としての権威までに高められていた。

インド・ヨーロッパ祖語が、サンスクリット語、ギリシャ語、スラブ語、ケルト語、イタリアック語を生み出したことと、これらの言語のうちの1つを、インド・ヨーロッパ祖語の位置に据えることは別である。

暗黙のうちに認められていた。(サンスクリット語が祖語)

他の言語に比べて古い特等を示す、古くから存在していると考えられる言語

理論的に3つの解釈が可能

1) それがあある言語の起源、出発点だとする。

年齢を与えることができる言語などない。どんな言語でも、その前に話されていた言語が継続しているもでだからである。ランゲージュは人類と同じようなものではない。

2) 言語のある状態が、他の言語よりも古い時代に発見されたという理解

2つの固有語が問題となっている限りは、古い方だけを考察の対象とすべき。

リトアニア語は、1540年からの過ぎないが、リグ・ベータのサンスクリット語にすら劣らない貴重な価値がある。

3) 「古い」、より古風、年代は抜きにして、その形態が原初的な型により近いままである言語の状態を示すこともできる。16世紀のリトアニア語は、紀元前3世紀のラテン語よりも古いともいうことができる。

サンスクリット語に対して、他の言語に勝る古さを認めるのだとしたら、2, 3番目の意味によるものでしかありえない。

このように、古さについての非常に混乱した考え方によって、語族全体に先行する何らかの特徴がサンスクリット語に認められたことで、後になって、この言語が母親の言語だという考えから解放されていても、側面にある言語としてサンスクリット語が提供する証拠に対し、言語学者たちはあまりにも大きな重要性を与え続けた。

自分たち独自の言語を話していた原初の民族が存在したことを明白に認めながらも、まず何よりもサンスクリット語を参照すべきで、この言語の証拠は、他の複数のインド・ヨーロッパ諸語よりも大きな価値を持つのだと確信していた。

共通の原初的な状態をよりよく知る努力をしなかった。

ゲルマン祖語のことを問題にせず、他のゲルマン方言に何世紀も先立つという理由で、・・・ゴート語は、祖型、つまり他の方言の源泉としての位置を篡奪した。

スラブ語、10世紀の証拠があるスラブ文語または古スラブ語のみに依拠していた。なぜならば、他のスラブ語はもっと後の時代からしか知られていないからである。

連続する時代に文字表記によって固定された、言語の2つの形態が、歴史の2つの時点で、全く同一の固有語を表示していることは極めてまれである。非常に多くの場合、言語的には互いに連続したものではない。2つの方言がそこにあるだけである。

この例外。最も有名な例が、ラテン語に対するロマンス諸語の例。

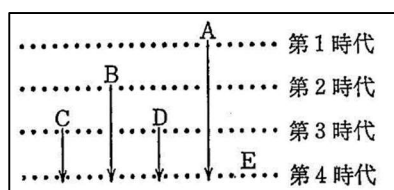
フランス語からラテン語にさかのぼるのは、垂直の線をたどると全く同じである。

ロマンス諸語の領域は、偶然にもラテン語が話されていた領域と同じであり、だからどの言語も、ラテン語が進化したものに過ぎない。

ダリウス時代(紀元前550年)の碑文のペルシャ語は、中世のペルシャ語と同じである。

その逆の方がはるかによく見られる。異なった時代の証拠が、同じ語族の異なった方言に属している場合である。

ゲルマン祖語はまず、ウルフィラスのゴート語に現れるが、それを何が継承したかは知られていない。次に古高ドイツ語の文献に現れ、次にまた後になって、アングロ・サクソン語やノルド語などに現れる。これらの方言や方言群のどれ1つとして、その前に実証されている方言を継承したものではない。



言語学は、このような状態に満足するしかない。

知られている最初の方言(A)に、その後の状態の分析から推論することのできるすべてのものが、前もって含まれていたことになるのだが、他方、これらすべての方言(A, B, C, D など)の収束点を求めると、Aより古い

形態、すなわち原型Xに出会うことになる。この場合、AとXを混同することはありえない。

第3章 再建({再構 小林英夫}) p.302 reconstituer des langues 再構成, 復元する

第1節 再建の本質とその目的 p.302

再建のための唯一の方法が比較だとすると、比較の唯一の目的は再建である。

時間の観点の中に置いて、唯一の形態が再建できるようにしなければならない。

ギリシャ語の mesos(真ん中)に対するラテン語の medius を説明するためには、インド・ヨーロッパ祖語にまでさかのぼらないまでも、methyos というより古い項目を仮定すれば、medius と mesos の両方を歴史的に結びつけることができる。

異なった言語の2つの単語を比較せずに、1つの言語から2つの形態を対立させても同じことが確認される。ラテン語で *gero* (運ぶ) と *gestus* (運ばれた) を比較すると、これら2つの形態がかつては共有していた語幹 *ges-* にさかのぼると考えることができる。

音変化に関わる比較では、形態論的な考察を常に援用する必要がある。

形態に関わる比較を行うとしたら、音声学の助けを得て問題を解明しなければならない。

比較はいつも形態の再建に帰着する。

過去を見る場合、先行する状態の完全で具体的な形態を再建することを目指すか

単語の一部だけに関わる、抽象的で部分的な主張だけに限定しておくか

孤立した事実の総体から、より一般的な結論を引き出すこともできる。

こうした多様な事実による再建がいったんなされると、全体的な形態に関わるすべての事実を統合して、完全な単語や語形変化表などを再建することができるようになる。

alyod 再建された形態の異なる部分を比較、文法の問題を規定する *-d* と、その種の意味を全く持たない *a-* の間に、大きな違いがあることがわかる。

再建された形態は、合体した全体ではなく、音声的な推論の、常に分解可能な総体であり、それぞれの部分は取り消すことができ、いつも検討の対象となるものである。したがって、再構築された形態は、それに適用できる一般的な対象をいつも忠実に反映するものである。

再建の目的は、形態をそれ自体のために復元することではない。これだけであれば、非常につまらないことになる。それぞれの時点で得ることができている結論に従って正しいもとの信じられている結論の総体を結晶化させ凝縮させることである。この学問の進歩を登録することである。

インド・ヨーロッパ祖語を完全に復元するつもり・・・正当性はない。

うまく話せるようになるために、ラテン語を言語学的に研究するのではない。

先史時代の諸言語の、個別の単語を研究する場合は、なおさらにそうである。

研究される言語全体や、言語が属している言語的な型について展望を得ようとすれば、再建なしに済ませることはできないだろう。

第2節 再建の確実性の程度 p.305

再建形-形態全体の確実度は、形態の統合の過程に介在してくる部分的な復元に割当てられる確実度に依存している。

次の3つの事実ならば、再建の信頼性を増すことに寄与する。

1) 単語が与えられた時、それを構成する音、その数、その境界は明確に区別することができる。

[-sn-] のような音群の中には、恐らく隠れた音、もしくは「わたりの」音がある。

発話主体は、要素の個数については常に一定している。インド・ヨーロッパ祖語の [ekwos] という形態の中には、異なって区別される要素は5個しかなく、主体はそれらの要素に注意を向けていたはず。

2) 音韻的要素。どの個別言語も、合計の数が完全に制限されている一揃いの音素を用いて機能している。

インド・ヨーロッパ祖語では、体系を構成するすべての要素は、少なくとも十数個程度の、再建によって実証されている形態の中に現れている。

3)ある言語の音的単位を知るために、その肯定的な性質を特徴付けることが必要不可欠だというわけではない。音的単位は、差異的な実体として考察する必要がある、その本来的な性質は、互いに混同されない。

複数の種類の e が認定されていない限りは、音質の確定は重要ではない。言語で区別されている要素(a, o, e)のうち別のものと混同されなければよいのである。

[ekwos](馬)の最初の音素は[medhyos](真ん中)の2番目の音素や[age](動かせ)の3番目の音素などと異なることなく、その音的な性質を特定せずに、インド・ヨーロッパ祖語の音素の表の中に、この音を記載し、数字によってこれを表すことができる。

[ekwos]の再建が意味するのは、ラテン語の[equos]、サンスクリット語の[asva-s]などに対応するインド・ヨーロッパ祖語の形態は、祖語の音素群の中から取られた、5個の決まった音素によって組み立てられていたということである。

第4章 人類学と先史学での言語の証拠 p.307

第1節 言語と人種 p.307

言語学者は、回顧的な方法により、・・歴史時代に入るはるか前にどれかの民族によって話されていた言語を復元することができる。

それ以外の民族そのもの、人種、系統、社会的な関係、風習、制度などのことが分かるだろうか。しかしそれは大部分が幻想だと思われる。

人種：言語共同体から血縁関係を結論づけたり、ある語族が人類学的集団と重なったりすることを信じることは誤りである。

ゲルマン諸語を話すすべての人々が、この身体的特徴(金髪・長頭・高身長)に一致しているというにはほど遠い。

血縁関係と言語共同体の間には、必然的な関係はないように思われるし、一方から他方を導き出すことも不可能である。したがって、人類学の証拠と言語学の証拠が一致しない事例が非常にたくさんあるが、その場合には、両者を対立させたり、両者のうちどちらかを選択したりする必要はない。そのどちらもが、固有の価値を保持しているからである。

第2節 民族体 p.308

民族的統一性は、言語共同体の二次的な要素でしかなく、必要な要素では全くない。

唯一本質的な別の単位がある。それは、社会的な結びつきによって構成されている単位であり、これを「民族体」{民族性:ethnisme 小林英夫}と呼ぶことにする。

宗教、文明、共同防衛など多種多様な関係に基づく単位で、異なった人種に属する民族の間でも、どんな政治的な結びつきでもない場合でも、作り上げることができる。

社会的な結びつきは、言語共同体{言語の共通性 小林英夫}を創造する傾向にあり、共通の固有語に一定の特徴を刻印する。逆に、民族的単位を何らかの方法で構成するのは、言語共同体である。

中世初期、ローマ的民族体が存在していて、政治的な結びつきはなくても、非常に多様な起源をもつ諸民族を統合していた。

逆もまた同じで、民族的単位の問題について、まず何よりも調べてみる必要があるのは言語である。

言語的証拠は、他の何にも勝るものである。

古代イタリアでは、ローマ人と並んでエトルリア人が住んでいた

エトルリア (ラテン語: *Etruria*) は、紀元前 8 世紀から紀元前 1 世紀ごろにイタリア半島中部にあった都市国家群

エトルリア語を 4 行読めば、この言語を話していた民族が、ラテン語を話していた民族群とは全く異なっていたことを十分説明できる。

インド・ヨーロッパ諸語が 1 つの語族を形成しているという事実から、原初的な民族体があったと結論することができる。

今日これらの言語を話すすべての国は、社会的な血縁関係によって、その程度こそ違え、この原初的な民族体の直接的な継承者である。

第 3 節 言語古生物学 p.309

言語によって、この共通の民族体の性質を知ることができるだろうか。

アドルフ・ピクテは、インド・ヨーロッパ諸語が提供する証拠の中に、「アーリア人」の文明の根本的な特徴を探し出そうとしており、そのことによって、この民族の非常に多様な側面を確定することができると考えている。その側面とは、物質的なもの (道具、武器、家畜)、社会的な生活、家族、政府である。アーリア人の揺籃地を知ることも試み、彼によればそれはバクトリアにあったとされる。



彼はこの民族が居住していた地域の植物相と動物相を研究している。

こうして創始された学問は、言語古生物学と名付けられた。

ヘルマン・ヒルトは、ヨハネス・シュミット (言語波動説) の論理に依拠してインド・ヨーロッパ人が居住していた地域を確定しようとした。

語彙に関わる事実を考察：農耕民で、居住地としてはロシア南部だと遊牧民の生活に適しているものとして、この地ではないとした。樹木の名前の頻度から、彼らの国は樹木で覆われており、ブランデンブルグ地方とベルリン地方に位置していたと考えた。

ただし、言語によってこの種の情報が得られるようにも思えないので、もし言語が情報をもたらすことができないのだとすると、それは次のような理由によるものだと考えられる。

1) 語源が確実ではない。語源が十分に確定されている単語が非常にまれ。

無謀な例 servus (奴隷) と servare (仕える) が、関連があるとした。正当性はない。Civil servant (公務員)

2) 単語の意味は進化する。民族が居住地を変えると同時に、単語の意味が変わることがしばしば起こる。

ある単語がないことは、この単語の意味が変わることがしばしば起こることである。

ある単語がないことは、この単語によって表されるものを、原初の文明が知らなかった証拠だと考えたのだが、それは誤りである。「耕す」に当たる単語は、アジアの諸語には欠けている。だからといって、この仕事が当初は知られていなかったことにはならない。それが別の単語で表されたという可能性も十分にある。

3) 借用の可能性。ある物がある民族のところに導入されると同時に、ある単語が、その民族が話す言語の中に、遅れて入ってくることがある。「麻」という名前は、その植物と共にやってきた。

言語外的な資料がないと、同じ単語が複数の言語にある時、それが借用によるものなのか、それとも、最初からある共通の伝統を消去立てるものなのかを知ることはできない。

親族関係を表す共通の用語。親族名称を見れば、インド・ヨーロッパ人のもとでは、家族は規則的であると同時に複雑な制度であったと主張することができる。

動物についても事情は同じ、牛科のような重要な種類について。

すべての言語において語形変化も同じ特徴を持っている。このような事態は、別の言語から後の時代に借用された単語だったとしたら、ありえないことである。

別の形態的事実。社会的な組織の、ある点に関わるという二重の特徴を持っている。

dominus(主人)と domus(家)の関係。様々に言われているが、言語学者はそれらの説に満足していない。

接尾辞-no-が二次的派生形を形成するのは、極めてまれであるからである。

まれであるからこそ、dominus(主人)の接尾辞に価値と輝きがもたらされるのである。

ゲルマン語のいくつかの単語

1)王 peuda-na-z (peudo の長、王)、ゴート語 piudans 古サクソン語 thiodan

2)dru-ti-na-z 軍隊の長、キリスト教の「主、すなわち神」

3)kindi-na-z (kindi-z=ラテン語 gens の長)

このように、二次的な接尾辞-no-は、ゲルマン語のあらゆる語幹にふかされて、「これこれの共同体の長」という意味を表した。(制度に関わる言語)

特異な接尾辞を持つ dominus は、イタリック民族体とゲルマン民族体の間に、言語的共同体だけでなく、制度的な共同体も形成されていたことの、反論いがたい証拠。

言語と言語と関係づけることで、これほど特徴的な手がかりがもたらされることは、まれにしかない。

第4節 言語類型と社会的集団の精神構造 p.313

言語が、それを話す集団の精神的類型を特徴づけることには役立たないだろうか。

言語的な手続きは、心的な原因によって決定されるわけでは、必ずしもないということである。

(否定語が、最初か、最後かなどの対比から、精神的な類型を導きだす。という俗説)

セム諸語、限定する名詞と限定される名詞の関係を、単なる並列によって表す。「構造体」と呼ばれる特別な形態が作りだされる。

この統語的な型は、セム人の精神構造について何かを明らかにしていると言えるだろうか。こう主張したら、それは相当に無謀だろう。

古フランス語でも、同様な構造が規則的に用いられたからである。

セム人の精神構造の消えることのない特徴の1つであるかのように思える統語的な事実は、その精神構造について、確かな手がかりはなにも与えてくれない。

別の例。インド・ヨーロッパ祖語には、最初に動詞的要素が来る複合語はなかった。ドイツ語にはそれがある。ゲルマン人は、祖先から受け継いでいた思考の様態を変えたと考えなければならないだろうか。

この改変は、否定的な偶然、detahaus の a が消去されたこと、によるものである。

すべては精神の外部、音の推移の領域で起こったということである。

音の推移は、まもなく思考に絶対的な束縛を課すようになり、記号の物質的な状態によって開かれた特定の道筋へと入っていくことを、思考に余儀なくさせる。

言語集団の心理的な特徴があるにしても、それは母音の消滅やアクセントの変化のような事実を前にすると、ほとんど重要ではなくなってしまう。

どのような言語形態であろうと、記号と観念との関係を絶えず変革させることができる。

諸言語の類型の確定と分類からは、言語学本来の領域に外部にいたのでは、なんの結論も引き出すことはできないと思う。

第5章 語族と言語類型 p.315

発話主体の精神に、言語が直接的に従うことはない。

どの語族も、ある1つの類型に、問題なく、そして決定的に属することはない。

どんな特徴も必然的に永続性があることはなく、偶然によってしか存続できない。

インド・ヨーロッパ語族、この語族が由来する言語が持つ独特の特徴

音の体系は簡素、母音組織は単調、極めて規則的で、徹底的に文法的な交代の原因となっている。

アクセントは高低アクセント、単語のどの音節にも置くことができる。

アクセントの位置による文法的な対立が機能することができる。

韻律は量的であり、長音節と単音節の対立のみ。

複合語と派生語を形成することは、非常に容易。名詞と動詞の語形変化は、非常に豊か。

語形変化した単語は、その中に限定要素を含んでおり、文の中での自立性がある。

このため、構造には大きな自由度があり、限定的あるいは関係的な価値を持つ文法的な単語（動詞前部要素、前置詞）はまれである。

これらの特徴のどれ1つとして、インド・ヨーロッパ諸語で完全に維持されていることはない。

英語やアルメニア語やアイルランド語などのように、全く異なった言語類型を思わせるほど。

1つの語族に属する異なった言語に、ある程度共通した一定の変形について述べる。

語形変化の仕組みが徐々に衰退していく。インド・ヨーロッパ諸語に一般的に見られる。

最も抵抗したのはスラブ語、英語は、語形変化をほとんど無くなるまで縮小。

原型の特徴、そこから派生した諸言語うちどれかでは見られない。

逆の場合、ある語族に属するすべての言語の共通の特徴が、祖語には存在しないことが確認されることもまれではない。

母音調和、この現象は、ウラル・アルタイ諸語に見られる。フィンランドから満州まで。

この顕著な特徴は、ほぼ確実に、後の時代の発達によるものである。

共通の特徴であっても、最初からあったものではない。

これらの諸語（ウラル・アルタイ諸語）が共通の起源を証明するために、母音調和を引き合いに出すことはできない。

これらの諸言語の膠着語的な特徴が、起源の共通性の証拠となることができないのと同じである。

ある単語に接頭辞や接尾辞のような形態素を付着させることで、その単語の文の中での文法関係を示す特徴を持つ。ドイツの言語学者であるヴィルヘルム・フォン・フンボルトによって1836年に提唱された。（ウィキペディア）

セム諸語、再建されたセム祖語と比較すると、ある種の特徴が保存されていることに、一見すると驚かされる。セム諸語は、不変的で、永続的で、語族の固有性に固執する類型だという錯覚を与える。

インド・ヨーロッパ語の特徴と対立。複合語がほとんど全くない。語形変化がほとんど発達していない。

語根の構成。語根は規則的に3個の子音を含んでおり、同じ言語の内部では、すべての形態で保持される。

本書の原則。変化しない特徴は存在しない。特徴が持続するとしたら、それは偶然によるもの。
もし、時間の中で、ある特徴が維持されるにしても、ある時間が経てば同じように消滅する可能性は十分にある。

セム語の、3子音の「法則」がこの語族をそれほど特徴づけるものではない。

インド・ヨーロッパ語族でも、語根の子音組織は厳密な法則のもとにある。Eの後では、i, u, r, l, m, n という子音群中の、2つの子音が同じ語根に含まれることは決してない。

インド・ヨーロッパ語も、セム語ほど豊かではないが、厳密な母音の働きを見せる。

この2つの例、この文法的な手続きの起源は同一である。盲目的な進化による純粋に音声的な変容である。

その結果として生じた交替は、精神によって補足され、文法的な価値と結びつけられて、音声的な進化の偶然によってもたらされた手本からの類推によって、広がっていった。セム語の3子音が不変であることについては、近似的なものに過ぎない。絶対的な性質は全くない。

「先験的に」確信することもできよう。

他の多くの言語に比べて、セム諸語が音変化を受ける程度が小さく、他の場合に比べて、この言語群では、子音がよく保存されたということだけである。

進化的、つまり音声的な現象であって、文法的な現象でも、永続的な現象でもない。

それに、音変化がこれから決して起きないと断言することはできないのである。

一般的には、時間の中で起こったことは、時間の中で再び起こること、またはそれに變形が加えられることはありうる。

シュライヒャーの、言語の中に、本来的に進化の法則を有している有機的なものを見ることで、現実を捻じ曲げて解釈。

彼はここでゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルからの強い影響のもとに、言語は段階的に発展・成熟・崩壊する有機体であるという理論を唱えた。また屈折語・膠着語・孤立語の3類型を確立し、これらの関係も彼の理論の枠組で考えた。彼は言語を生物になぞらえるのが適切であるとし、競争を経て変化していくものであるとした。これはチャールズ・ダーウィンによる進化論の提唱に数年先立つが、進化論の影響ではなくロマン主義やドイツ観念論に基づくものと思われる。むしろ進化論の方が当時の言語学思潮をアナロジーとして利用したとの考えもある。(ウィキペディア)

言語が別の意味で有機的なものだ、疑いを差し挟まずに考えていきたいと思う。

人種あるいは民族的集団の「真髄」は、ある種の決まった道へと、絶えず言語を導く傾向にあると仮定するのみである。

言語学に隣接する領域に足を踏み入れてしまったのだが、そこから帰結するのは、全く否定ではあるが、この講義の根本的な理念に合致するだけに、一層興味深い教訓である。

「言語学の唯一して真正の対象は、それ自身で、それ自身のために考察される言語である」。

(

